

「日本語は役に立つか？」

～国際語としての日本語の可能性を探る～
こくさいご にほんご がのうせい さく

記念講演 「日本語と私」
きねんこうえん にほんご わたくし

ドナルド・キーン コロンビア大学名誉教授
だいがくめいよきょうじゆ

1999年12月1日に、国際交流基金日本語国際センター設立10周年を記念して、国際シンポジウム「日本語は役に立つか？」～国際語としての日本語の可能性を探る～が開催されました。本号では、ドナルド・キーン コロンビア大学名誉教授による記念講演の内容を要約して紹介します。紙面の都合上、全部をご紹介できず残念ですが、国際交流基金ホームページ (<http://www.jpff.go.jp/j/index.html>) で全文を公開していますので、是非ご覧ください。

なお、本シンポジウムのパネルディスカッションの内容については、次号で紹介する予定です。

日本との出会い

小さいとき、私は日本のことは全然考えていませんでした。日本の子どもだったら、特別に外国のことを知ろうと思わなくても、テレビゲームとか、コンピュータとか、日本語になっている外来語がたくさんありますし、野球を観に行ったら、選手の胸にある動物の名前は外国語で書いてあります。しかし、私の場合はそういうことは全く考えられませんでした。7、8歳のころ、親から子ども向けの百科事典をもらいました。その別冊にフランスとオランダと日本について書かれていましたが、いま頭に残っているのは、太鼓橋に立っている舞妓さん、あるいは「HAIKU (俳句)」という、非常に短い詩歌が日本にあることぐらいです。

私が中学生になったころ、同じクラスに日本人の女の子が入ってきました。それ以前は日本人を見たことは一度もなかったと思います。ところが、私は彼女と話した覚えが全くないのです。日本に興味になかったし、『世界の歴史』の授業でも日本のことはまず登場しませんでした。彼女についてのいちばん鮮やかな思い出は、卒業式のとき、校長先生が日本人の女の子の名前を呼ぶのに名前と名字を逆さまに言ったことです。当時彼女のことをたいへん気の毒に思ったのですが、それから10年か15年あとになって、その意味を知りました。

日本語との出会い

大学1年のときに、偶然、中国人と親しくなりました。彼は私に漢字や簡単な中国語を教えてくださいました。私は、中国にも日本にもある共通の文字に深い関心がありました。どうして漢字に魅力を感じたかということ、たぶん私が子どものころに切手を集めていたからだと思います。

新しい切手、変わった形の切手を集めて本に貼るように、私は珍しい漢字を頭の中に貼っていたのです。私は画数の多い複雑な漢字がいちばん好きでした(笑)。

1941(昭和16)年、私は19歳になりました。ある日、ひよんなことから、夏休みに3人で日本語を勉強することになりました。私たちが使った教科書は「さいたノさいたノさくらがさいた」という、日本の小学生が使うものでした。そのあと修身の教科書も使いました。ほかの2人はだんだん日本語は難しいと思うようになり、最後まで続けて勉強をしていたのは私だけです。

夏が終わって大学に戻ってからも、日本語の勉強は続けようと思いました。当時、外国人が日本語を読めるようになるための新しい教科書ができたばかりでした。日本語をマスターしようと思う人にとっては、この教科書は全く役に立たなかったと思いますが、「さいたノさいたノさくらがさいた」よりは大人向けの内容がありましたから、私たちは勉強を続けたのです。

同じ年、私は日本文化について勉強をしようと思いました。そのとき、私の一生の先生に出会うことになりました。角田柳作先生です。先生は、文学作品や哲学などあらゆることをよくご存じでした。

大学で日本語を勉強しましたら、ますます日本語の難しさがわかるようになりました。例えば中国語と違い、一つの漢字に読み方が幾つもあります。また、敬語の問題もありました。それから、男性語と女性語の違いがあることも意外でした。

日米開戦と海軍日本語学校

同じ年の1941年の12月、たいへん悲しい出来事がありました。開戦です。私は、戦争は人間のあらゆる行為の中でいちばん醜いものだと固く信じていました。しかし、



実際に戦争となると、どうすればいいかということにはなかなか言えませんでした。ちょうどそのころ、『源氏物語』の英訳本を読みまして、実にすばらしいものだと思います。日本にちゃんとした文化があると初めてわかったような気がしました。そして私は、そのころの暗い新聞から『源氏物語』の世界に逃避したのです。

私は、アメリカ海軍の日本語学校に志願して入学できることになりました。毎週6日間、毎日4時間の授業でした。教科書は長沼直兄さんという方が戦前に作ったもので、いちばんいい教科書でした。2時間の読書と1時間の会話、そして最後の1時間は書き取りでした。当時、私たちが覚えたのは旧仮名遣いと本字です。怖い先生が黒板の前に立って、例えば「台湾」などを非常に速く書きます。台湾の本字は実に画数が多いのです。私は画数の多い字が好きでしたからわかりましたが、ほかの人たちは途中でやめました。11か月の勉強で、字紙を使いながら日本語が読めるようになりました。それから、会話がいちおうできるようになりました。また、手紙などを日本語で書けるようになりました。最後のひと月ぐらいで私たちは文語も覚えました。

私たちは11か月の勉強を終えてハワイに派遣されました。ハワイに着いた翌日から翻訳を始めました。しかし、世界にあれほど退屈なものはありません。例えば、もう存在しない日本の部隊のすべての人の名前を解説しなければならぬのです。そんなある日、私は小さい手帳を見つめました。日本人の兵隊がつけていた日記や手紙です。私は日本人が戦争を本当にどう思っているのかを知ることができました。変な言い方ですが、私の最初の日本の友だちはみんな死んだ人ばかりでした。私にとって忘れられない体験でした。

戦後のこと

戦後になりますと、戦時中に日本語を覚えた若い人たちは、日本語は役に立たないということでほとんど全部やめました。しかし、私はいちばん若かったし、ほかに仕事はありませんでしたから、いろいろ考えて、日本語でやろうと決心をいたしました。私の一生の決意の中でこれがいちばん重要でした。

私はまずコロンビア大学で勉強し、また角田先生の下で勉強して、1年間、ハーバード大学に留学しました。そのあと英国のケンブリッジ大学に就職しました。当時のケンブリッジ大学の日本語教育は非常に変わっていました。日本語をひとつも知らない若い英国人が、最初に日本語として読んだのが『古今集』の序です(笑)『古

今集』の序は難しいのではないかと思っていましたが、冷静に考えると、今日の朝日新聞よりもはるかに読みやすいのです。まず漢字の数が少ない。また、口語を知らない人にとっては文語のほうがやさしいのです。文法ははっきりしているし、例外はほとんどありません。それに語彙が非常に少ない。そういうことで日本語をひとつも知らない学生でも、「やまとうたは、人の心を種として……」とか、そういう言葉を覚えたわけです。私は会話の時間を頼まれたのですが、会話は本当に傑作でした。学生たちが知っているのは、10世紀の紀貫之の日本語です。そういう会話ができるのは意外でした。

日本語の美しさ

私はコロンビア大学の大学院に戻ったときに、角田先生の下で勉強をしたと申しましたが、戦争が終わってから私のような若い人が大学に戻りました。大変な知識欲がありました。そして、私はますます日本文学に魅力を感じるようになったのです。平安朝の文学として、『源氏物語』の一部分を読みました。私は日本語なら何でも読める自信はありましたが、『源氏物語』となるととても難しい。しかし、その美しさ、その文学のよさは十分に認められました。そして私は、日本語そのものの音とが、音楽的な面に初めて気がついたのです。こういうことがありました。仏教文学の講座のときに『徒然草』をやりました、あまりにも文章が美しいので、日本語がひとつもわからない人にも読んで聞かせたのです。「あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ち去らでのみ住み果つる習ひならば、いかにものあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。」私は自分で美しいと思っていましたから、仮に日本語がわからなくても、その美しさを感じるはずだと確信していました。言葉の音楽性を無視してはいけません。

日本留学

1953年、いよいよ夢がかなって日本に留学できることになり、すばらしい2年間を京都で過ごすことができました。でも困ったのが関西弁です。私が覚えた日本語に関西弁はありませんでしたが、ときどき、何を言っているのかなと思うことがありました。また、私が覚えた日本語は、どちらかというと大正時代の日本語ですから、「乗合自動車はどこから出ますか」と聞いて、「えっ？

あ、バスのことですか」と言われたことがあります。笑われたのはそれだけではありませんが、私は日本語をしゃべっていたので、一生の友だちになれる、貴重な人が何人もできました。日本語を話すことは、友だちの作り方の一つです。

幸運なことに、私の下宿には、あとで文部大臣になった永井道雄さんが泊っていました。彼とは毎晩話して非常に勉強になりました。例えば私が下宿に入ったときに、そこの奥さんに「何新聞を取りますか」と聞かれて、「新聞のような俗悪なものは読みません」と言ったのですが、笑入、永井さんのお陰で私は新聞を読むようになりました。新聞だけではなく雑誌などにも興味を持つようになりましたし、永井さんと一緒に選挙の演説を聴きに行ったりして、生きた日本を知ようになりました。それは私にとってきわめて貴重なことでした。

私は京都にいる間、芭蕉の研究をやるのがいちばんの目的でした。しかし、永井さんから毎日聞く話で、もっと根本的なことをやったほうがいいと思い、「日本文学撰集」を編集することにしました。それはいま、日本語を読めない外国人のための2冊本になっております。自分の話で恐縮ですが、「あの文学撰集を読むことによつて、初めて日本に文学があることを知りました」とか、「私も日本文学の研究をやるうと決心しました」とか、そういう声を何回も聞いたことがあります。これも私の日本語が役に立つことになったと思えます。

ケンブリッジにいたころは、現代文学は学問ではないという非常に強い姿勢がありました。私自身も、文学は古典に限ると思っていました。しかし日本にいる間に、そうではないと感じるようになりました。世界に日本のことを紹介したい、日本のことをより正しく見直してもらいたい、そういう気持ちが非常に強くなったのです。

日本語と私

いまでも私は毎日、何か新しい言葉を覚えていきますし、日本文化について新しい知識を得ることがあります。40何年前から日本語を使っていますから、私の中では日本語も深いところに入っていて、英語では言いえないような言葉もあります。たとえば、「もったいない」「たのもし」「ありがたい」「浅ましい」などです。話の中で私はそういう言葉を自然に使っていますが、英訳はできません。

日本文化全体が宝庫です。中にはいろいろな宝物が入っている。その扉を開けるのは日本語です。扉を開いて入ったらいろいろな宝物を見つかけられますけれども、

扉の前に立っているだけでは中にどんなものが入っているかわかりません。

私が翻訳する場合、日本語と英語をどういうふうに使ったら、より正しい、より原文に近い翻訳ができるかということがあります。場合によっては非常に難しい仕事です。例えば、私は三島由紀夫さんの『宴のあと』の英訳をやりましたが、その小説の中で、一流の料亭の女将さんがお客さんたちと話す場面があります。そのお客さんたちはみな偉い政治家や事業家ばかりです。そういう人に対しては無礼な冗談を言ってもいいのです。そういう人たちは自信があるから、無礼な冗談を言われても傷を受けることはありません。問題は、「無礼」をどう英訳したらいいかということです。辞書を見ましたら、「rude」「impolite」「discourteous」「disrespectful」「unceremonious」、全部出ていました。しかし私は、そういう言葉ではない、別の言葉があると本能的に思いました。翻訳が完成したあと、私はカンボジアのアンコールワットを見に行きました。ちょうど夕焼けで、全体がオレンジ色になりました。何とも言えないすばらしい光景です。そのときに「uncomplimentary」という形容詞が浮かんだのです。それは私が探していた英語でした。

日本語は役に立ちますか？

私自身は一種の宣教師です。昔の宣教師は外国の宗教を日本に広めましたが、私は逆のことをやっています。外国で日本文学や日本文化を広めているつもりです。私は現在、77歳になりました。しかし、私はまだやるべきことがいっぱいあります。それは日本研究でなければできないことです。何よりもそれは、日本語を覚えたことによるものだと思っています。そういうことで、私に「日本語は役に立ちますか」という質問がありましたら、その返事はわかりきっております。

ドナルド・キーン氏 略歴



1922年ニューヨーク生まれ。コロンビア大学で比較文学を専攻するかたわら日本語と中国語を学ぶ。第二次世界大戦中は海軍語学学校を経て情報関係の業務につき、戦後、コロンビア大学大学院に復学、日本文学研究の道に入る。ケンブリッジ大学で博士課程を修了、引き続き教鞭を執る一方、1953年から2年間、京都大学に留学。コロンビア大学教授を経て、1988年には同大学最高称号であるユニヴァーシティ・プロフェッサーに任命された。1992年に退官、同大学名誉教授となり現在に至る。毎年1年の半分を日本で過ごし、研究分野は日本文学にとどまらず、歴史・文化等多方面にわたっている。1975年勲三等旭日中綬章、1983年国際交流基金賞を受賞。著書に『日本文学の歴史』(全18巻)等多数。